

2人の異才-弼楽高校に潜む表現者について-

渡瀬慎也×熊井典秀

問題作「結ばれたがり」を語る。

渡瀬慎也

日本のソングライター、ギタリスト。私立弼楽高校の3年生で、軽音部。4ピースロックバンド"San Han KikanZ"の仕掛け人であり、作曲とギターを担当している。2nd EP「少年たちの挽歌」は、今回のインタビューで取り上げられる映画「結ばれたがり」のオリジナル・サウンドトラックでもある。全編で作曲とギターを担当している。

熊井典秀

日本の写真家、映画監督。同じく私立弼楽高校の3年生で写真部。キカンズのフォトグラファーを担当している傍らで、部活内では短編の映画撮影に勤しんでいる。今回の「結ばれたがり」では初の長編、そして恋愛映画を撮影したと言う。本作は綿栞市の自主製作映画コンテストにて審査員特別賞を受賞。

妄想を役者というフィルターに通しまして、そうして撮り上げた作品です。

——本日はよろしくお願いします。

渡瀬：よろしく。

熊井：おう。何でも答えたるわ。

——お二人が出会ったきっかけはやっぱり学内ですか？

渡瀬：そうだね。僕は元々入学したんだけど、彼が編入で。去年からやってきて、福岡から来たって言って。

熊井：私は元々こっちに来ることなかったんやけどね。父親が転勤する関係でこっちに来たと。で、元々あっち(前の学校)でも写真撮っとったけん、入って見たらそんなやったちゃん。ばってん自由にしていっちゃう訳やから俺はそこで愛機のライカと共に学校の風景を撮りまくった。フィルムに。

渡瀬：僕が友達と帰ってるところを撮られたんだよね。で、それで話しかけられて。こんなのが撮れたっていきなり話しかけて渡したものだから、最初は変な奴って思ったんだけど、写真見るとホント映りが素敵で。

熊井：それからやったね。向こうが次の日俺ん事尋ねて、「僕バンドしてるんだー」って。撮れと。

渡瀬：ぶっつけの営業みたいな知り合い方だったよね。けど、それから結構互いのこだわりに共感出来たりとかで、今はもう彼に撮ってもらってる。

——今回の映画では逆に、熊井くんが渡瀬くんに頼んだようですね。

渡瀬：そうだね。帰りの会で部活行く前に彼が待ち構えてて。どうした？って。

熊井：渡瀬のバンドの空気感を映画に使いたって訳でな、書いてもらうことにしたんよ。劇中歌を。

渡瀬：そうそう。元々それ以前から新曲で「夕間暮れの君に」っていうラブソングに近いものができてて、それを気に入ってくれたんだよね。

熊井：あのたどたどしい距離感は君んこのベース(榎本康介。ベースの他に作詞も担当している)やないと出せん。実に。あれを最後流して、終われるような映画を撮りたかった。撮りたくなかった、ちゅうのが正しいかもしれませんね。

——もともと、曲からインスピレーションを受けたんですね。

熊井：そうやね。元々私はありふれた音楽をそがん聴かんタイプではあるけど、映画音楽はバリ聴くっちゃんね。で、渡瀬の曲が映画に欲しかった。映画音楽って言うのはとても壮大で、なおかつ作品のフニキを決定づけるものでありまして。聴かんなりに好きですよ、久石譲とか坂本龍一とか。「菊次郎の夏」とか最後、あれ流れてね。毎回泣くわけです。それとは離れた位置にあるジャンルのものを欲しがったのは、恐らくそこに高校生の熱量を感じたからでしょう。

渡瀬：彼の映画の話を聞いて、それからどういう曲が欲しいかって話もしたね。僕は元々ギターやってたけど、全然DAWとかで打ち込みをしてオーケストラを作るなんてことも出来たからそういう曲が欲しいのかなとか思ってたけど.....

熊井：(わざとらしくエアギターを弾く仕草)

——バンドが欲しかったわけですね。

熊井：そう。高校生の恋愛に焦点を当てて、それで高校生の青春というものに何が相応しいか。軽音やと私は思ったわけです。学ランの連中が、いいとは言えないエモノを青臭さで包んで掻き鳴らす構図っっちゃうのは何とも尊いものがあると思ってのことでございますね。

渡瀬：なんか、僕に任せられると随分理屈っぽい青春にならないか心配だったんだけどね。けど、こういう曲が欲しいとかどういう曲が欲しいみたいなのは途中掛けのものを見せられながら、なるほどって。そうやって作っていった。

——そうして4つの曲が完成したんですね。

渡瀬：4つ.....ではあるけど、厳密に言うと更に1曲の1つの場面を更に展開してそれをBGMにしている事もあるから、本当は7~8曲くらいあるんじゃないかな。まあでもそれを収録するのは蛇足かと思ったから入れなかった。

熊井：私があ、こういう意図でって入れてるもんやから、その"祖"になったものが入っとるっっちゃうわけやね。

——映画は実体験を基にしたという話がありますが、一体どこまでを反映しているのでしょうか？

熊井：それはねえ、私が1年の頃見惚れた女がいて。けど、それは噂に隠れた高嶺の花みたいなもんで。普通に生きてれば決して関わることのない子やと思ってます。私はその子の名前と素性を一方的に知っている。この映画は、もしも私がその子に話しかけたりなどしてたらきっとこうなっていたという捏造の記憶でしかないんですね。妄想を役者というフィルターに通しまして、そうして撮り上げた作品です。

渡瀬：失礼を承知で言うんだけど、すごく気色が悪くていいと思う(笑)。

熊井：(笑)。

渡瀬：だけどその妄想を昇華させてこんな映画にしてしまうし、それがちゃんと面白かったもんね。その熱量を僕はとてもリスペクトしているよ。

ハッキリ言わせていただきますと、「軋轢」ですね

——出来上がって手応えは如何でしたか？

熊井：私はいいもんが撮れた！と思いますね。今は。後になって、ありゃ失敗やったと言うことがあるかもしれんが、とりあえず今は納得の出来でございます。渡瀬はどうね？

渡瀬：僕はねえ、あの作品とってもいいなと思ってるよ。特にさ、小鳥遊ちゃん(「少年たちの挽歌」のジャケットに映る女の子)の、誰つかずな感じというか、曖昧な恋模様を身をもって振る舞うあの感じがとても好き。現実にあんな子いたら、とんでもないことになってると思うよ。

熊井：そう。物語はそんな誰つかずなエミちゃんのね、全てに惹かれて狂った少年の話なんやね。もどかしいやろうね、どうやっても最初は振り向いてくれらんと。けど、自分のために必死なことに気づいたエミちゃんもやがて狂い出す。その、狂った男女の営み。結果としてそうなった訳やけどね。もちろん、直接は撮らんかった。が、やっぱ倫理が良くなかった。校内でも気まずい空気が流れとったね。

渡瀬：それは狙いだったのかい？

熊井：狙いやったよ、もちろん。私が思うに、気の触れた男女は成人前に営んでしまうもんやと思ってます。表向きのこの社会やとそれは良くないことやと指をさされるし、実際に講評やとそこについて厳しい話をもらったね。けど、私はそのくらいの歳に興味を持ち、ひっついて、まぐわって、その凹凸を飽くまで擦り続けるのは自然やと思ってるんですね。直接は撮らんかったが、許されるなら全然そうしていたかもしれませぬ。

渡瀬：いち高校生の自然な感性のままに撮影してるわけだから、その言葉に説得力が増しているし、僕から

言わせれば学生にやらせたのは間違いじゃないと思ってるよ。演じていても、そこに移るのは高校生のリアルな表情なわけだから。プロの大人にやらせるのとは違う画が撮れると思うし、その方が作りたいものに合ってたって話だよね。

——実際にリアリティを追求した結果、あのシーンが生まれたわけなんですね。

熊井：必然やったね。しつこいけど、直接身体を重ねるというシーンは入れていないです。それはやっぱり倫理にも良くない。あくまで直前までのあのキワキワの緊張感を、じっくり映すことにしたのです。純情をぶち壊しにされた背景を持つ男女が、床の上。制服を握って、息を迫らせる。そこまでのあの異様な空気はフィルムに収まらんほど、素人のフンイキやなかったね。

渡瀬：鑑賞してたけど、その時一緒にいた仁川くんも榎本くんも(二人とも彼のバンドメンバーである)、目を逸らしてたのが面白かったね。それほど、どういう訳か空気が違ったんだ。

熊井：そこは私の狙い通りやったね。「この2人、これからああしてこうしてどうなるんや」っっちゃう艶めかしい予感を背負って欲しかったと。で、最中は所謂メタファーとなるシーンを撮影しましたね。そこまでじっくりやるとイヤラシイし、そもそもの本題はそれではない。

渡瀬：ベランダのアサガオが枯れるシーンだったよね。

熊井：その意味が分かる人には分かると思います。これに関しては私の口から言うことやなか。なぜその、営みをそれで表現したのか。単なる快楽ではなかったんですね。

渡瀬：そのシーンに至るまでの背景をしっかりと描写してくれたから、僕にはそのアサガオのシーンはとてもしっくり来た。特別賞になったのもそれが決め手だったらしいじゃん。

熊井：たまたま分かる人やったっっちゃう話や。むしろ私の今作はマジョリティでは受け入れられないような非常にセンシティブでエロティックでバイオレンスな作品やと思ってます。

——今作はどういう思いを持って作品に取り組まれたんですか？ テーマやコンセプトがあった上で、制作に入ったんですか？

熊井：テーマね。これはなんというか、あの～……ハッキリ言わせていただきますと、「軋轢」ですね。決して健全ではない男女の青春。そこに付きまとう思惑や、下心や、破滅願望、性的倒錯。若くしてこぼれる梅のような酸っぱさを十二分に表現したかった。高校生のうちにやりたかったですね、これは。大人がやるんじやあ意味はなかやと。

純情を8ミリに通して描きたいと思っています

——では、今作を作るにあたり、苦労した点等ありましたら教えて下さい。

熊井：撮りたいことが多すぎたが故に、コンテの段階でそれを取捨選択せんとあかんかった。本当はもっと

壮大なものを撮りたかったんですね。しかしそれには時間が伴うのと、体力を使うわけです。本当は3部作にしたかったが、コンテストのこともあって1作に纏めた。その纏める際に何を省き、どうケリを着けるかでだいぶ頭を使ったところがありますね。

渡瀬：けど、それが結果的に独特なスピード感に繋がって、観る人を飽きさせないものにしたと思ってるよ。

熊井：結果やとそうっちゃけどもね。本当はもっと男女の駆け引きにカメラを向けたかった。

渡瀬：頻繁に出てくる喧嘩のシーンとかは上手いなと思ったけど。

熊井：あれはですね、高校生の感情による取っ組み合いを表現したと。商業やとこういうアクションは派手にやることが多いが、高校生の喧嘩なんて些細で矮小でこじんまりとしているものちゃんね。撮影のための喧嘩ばってん私怨の混ざらんはずやったが、割と表情が良かった。

渡瀬：過程は相当な苦勞だったわけだ。

熊井：過程は、やね。結果として独特な行間や俯瞰したアクションが返ってリアルになったし、EDのおかげで後腐れもなく綺麗に終われたと思います。やけん私はいいいもんが撮れた！と先程話したわけです。

——『少年たちの挽歌』はボカコレ冬2025に参加されていましたが、その他の曲は今作に入れるために作り始めたものですか？

渡瀬：EDの『夕間暮れの君に』は以前からライブでやってたから、タイアップが近いかもしれない。『挽歌』は映画の話の後に作ったけど、普通にバンドの為の印象が強かった。

熊井：むしろ、あの曲があったことによって高校生の喧嘩や諍いにより身近な解像度が加わった。後の2曲は映画の為やったね？

渡瀬：間違いないよ。『告白』に関しては作中はずっとインストだったけど、アルバムでテンシューくんによる作詞で独白のような朗読がある。『決闘』は、喧嘩のシーンで使われたり、途中のダブのパートを単体で使ったりなんかもしたね。榎本くんの作詞だとそこは嘆いてる様子だけど、映画を見てる人からすればそういうシーンではないっていうのが分かるはず。ミスリードって奴？僕の指示ではないんだけど、そこの空気感にそういう無常を感じたのだろうね。

熊井：あの曲は歌詞入りで使わなかったから、その辺は自由で構わなかったよ。むしろ、映画のイメージがあるかもしれん中であいつは伸び伸び書いとるのが、私はとてもええと思います。

——San Han KikanZは鋭いギターの掛け合いに重なる、力強いテトさんの歌声が魅力だと思いますが、今回の映画でインストを提供したという面で特にこだわった点などはありましたか？

渡瀬：バンドはテトちゃんが入る以前からあったけど、でも今回はテトちゃんもギターを録っているから、

それを踏まえて作曲はしたかな。彼女のできるコードワークにはまだ限りがあるし、その制約の中でいかに映画に合うものを作るか。それを意識したかなあ。別にインストアルバムに振り切って難しいことやらせても良かったんだけど、あまり手を入れると今度は彼の映画を殺しかねないわけで。あくまでムードを盛り上げるものとしての役割を全うしたつもりだよ。

熊井：君ら、パンクやんね。難しいことに対する反証としてのロックミュージックを行っているし、この映画にはそれがお逃え向きやった。

渡瀬：まあ、やってる音楽を辿ればって話だけでもね。僕の立場で言ってもいい話なのか分からないけど、高校生がギターを握って最初にやる音楽はセックス・ピストルズみたいなパンクだと思ってるんだよね。

熊井：簡単やもんな。

渡瀬：それもだけど、多感な時期の高校生だからこそ、衝動の詰まったロックが似合うと思ってるフシはある。

熊井：キサマも高校生やけどな(笑)。

渡瀬：間違いない(笑)。ほんとに、どの立場で言っているんだろうね。

——見ている人が緊張するシーンというのは常に考えていますか？特に、同級生に胸ぐらを掴まれて壁に詰められる場面はあまりにも演技然としていなくて、まるで本当に相手を恨んでるように見えてましたが。

熊井：考えてるのかもしれんね。そして、その～……緊張、からの緩和っっちゃう創作のキホンを度外視しとるからでもある。あくまで撮る側からの感覚っちゃけども、私含めて高校生は常にどこか不完全なんですよ。それこそ、プロの役者やテレビ屋みたいに指示されてこなせるような場数はない。素人なんです。素人であるからこそ、加減やカメラを気にせずに、飽くまで自然体でやる方が身近な感覚に訴え掛けれると思ってやってます。非常に泥臭い。けど、それが更にこの映画の奥底の思想であるドロドロの人間模様を表せてると思う。

——では、今後はどんな作品を撮りたいですか？

熊井：在学中である限り、私は学生のフレッシュな振る舞いや心情、純情を8ミリに通して描きたいと思っています。と同時に、その恐ろしさを撮りたい。いわゆるサスペンスやね。

——映画の見どころを2人に紹介して頂けると嬉しいです。

熊井：見どころ！……と言うよりかは、台詞と台詞の行間を察せると、よりディープに分かるもんがあると思います。

渡瀬：あくまでフィクションだけど、けど嘘みたいなわざとらしさは全くない。表情の僅かな動きを特に見

て欲しいね。日常に生きる高校生がそこにいるから。

——最後に、何か書いておきたいことがありましたらお願いします。

熊井：山岡家のサービス券がもうそろそろで50枚になりそうや。あの一、Tシャツの引き換えできるって本当かいな。

渡瀬：僕に会う人、「あれ歌ってよ」というのはご勘弁願いたい。ちゃんとライブに来てくださいね。もてなすから。

ここまで読んで下さりありがとうございました！次回は軽音部で作詞を行う生徒にマイクを向けたいと思います。次回をお楽しみに！

企画・インタビュー：灘町朋美 (私立弭楽高校2年放送部)